

027
387
1

書
名
氣
朝



029
389
1



愛知女子
第1814號
圖書

四九六



信湯遊て香々如事雲ハ五穀此
精ふ草と冬々を起したためしを
いひるむし一芭蕉の翁真砂り御乃
比骨良隠古懐子みより一雪ほろけ
少あつくる冊子あまそハ風子れ魂の
凝りてなまじりりの之うははあ乃
雪ほろ布ハ詠諧乃精ふし一やゆ

くねる世れど一先茶をたのむと白く
乃妙なるてハ雪にも五つもまじり
一さハハハ雪は吾氣ハおれずけ
小しき事只ゆきは語希なり

あふ四し未菜

半化居士



仙階雪麻呂氣上

昔言何某此何ちちくかり居とをたて
朝な夕なよとてそる家ハおれぬ時ハ
茶を折く言たまはくと朝日茶漬煮夜々
さうらへ朝とすく性陰深をぬむ人々
交金をとりある夜々よとれく
さう火とけしおれぬ人々雪まらけ
と世銭

深川八雲此く

米ふり雪はぬきややけ中 三三

三三 菊 笑

平好夜より三三依水 依水

三三 酒 心

ほけやふれ雪姫をさへ一門か 苔 翠

三三 文 心

岩一升雪をかきけや山折炭 泥 芥

おれく茶 笑

雪ふかふらや一ととよらや人傳 夕 葉

おれく巨 麩 笑

はまたへ一をうぬててと雪は月 友 五

ほくこそは存の友ぬもあう季 三三 哉

さうとては空さりのや枯れは 杉 風

ほりけても長どつく我も年ふぬ 雪 良

元祿二仲去塔山旅店まで

うけうふのこ家肩もさうか子哉 三三 哉

あやりのうまをー里り 音 音

杣の家子 稻活れあへよらつくへ 塔山

弟ハうりとええ様のあーり 此節

いさよしも同一各取よ取りき利 音

あゝ後をかかそとのうまれ秋 ちて成

藤原ちあよめぬ ぬくもおもひるま 節

咽 ぬき杉ふともけたいん川 山

又月と小袖の綿もぬきつくれ 節

おちきけ髪成とれき話へり 音

あゝれく恋ふふもおけり 山

かきくちふぬれやけり 節

はくけさ城とこへ巨煙さうりて 音

せーよをいりり日待とむは 翁

そのきもあひハ交とをぬきよる 雀葉

さよれくきりま法の家 山

多ひさるほあちぬいー八月と花 音

浪 香妻の不二流うこうす

業

客よひく汐干ぢわくれひうぢぬん

翁

物よ追う 裂 あらう乃むぢぢ

庄

城山の秘密を何くみのぬきて

山

起る火流吹うひはさう素

翁

行陣を送りゆく月夜

業

組てあうせい麻駱言あまらり

山

山風よさひくく落る葉たぬう

庄

玉木ぬまは谷陸乃小家

北観

詠うも先と身をやまう人相ひ

翁

あはゆ百合ふふううわ

業

狼の着しをあくは夏乃月

嵐竹

みつぬみやま俳ほくりく

山

麦急まん詠訪のいてゆはくを

翁

旅麻院くふ因乃あまの

言

何れよ人乃徒者と身はまけ

業

榎子まき丸ハ朝乃を留めぬ 山

一門のむえ衣乃すほくす 報

ほくすくすくす北筋はとうち 4

翁 八 曾良八塔山ハ此筋ニ

光榮五 北鯤ニ 嵐廿二

古畑や甘菊摘り ねとことと 芭蕉

大井川 柳の幸や石むしり 茶堂

大井川 馬も阿やかぬ柳ま 沾座

琴瑟書画をぬももも人老の去 岩立

梅ちう紀辰柱やとくまきもの 杉風

とほくと日ま入切く梅乃花 全

ます柳ま窓ふうりりり 柳舟 全

まきまきて菜花を拵や撥之と 全

ふるはくくりにてりやすし 全

ゆきあはる海の光りやまき此時 全

去風又え失ふよとて崔ふ 赤堂

船の子妙何城り来よのわりよ 全

室の八岳

糸遊手結つさふりさうれ 全

入る保日も糸申さ乃名跡うね 全

待けうぬ里亭何をうまむれ 全

入逢のうもささきをまむる 全

日笠山

阿くキふと青葉小お葉れ日の光 全

黒髪山八岳かきておひさし

はな松傳赤深の眺共よせんを収ひ且ハ

四野旅の雅をうらんと旅立暁發を刺て

利於て黒髪山よ 夜更 菅良

大峰町山を登りて流を岩洞の頂より

花流一七百尺お岩の碧傳ふ露よりおと

根の流よあやう傳へ信より

時多うく之れ遊乃く長 翁

皆村々遊子翁や夏はくめ 全

京次余康嬰松寺とあり

妹おふ人を枝折れ夏野多

喜此度とををあけ松の翁 嬰松

村雨又市のかりやと吹くく 首長

町中ゆり川 喜れ 月 翁

箸磨をよみ括ち初く夕涼 松

秋くさ画く帳子無き七 良

との心ハ麻は鳥城かくはきて 翁

痛くこれ髪のはくま糸合 翅輪

尋うに火と焼付け家もや 良

盗人こりさ 寸六^{カガ}乃里 松

松の松は髪とをくくてはく人 翁

雪ら突分て連孔始 松

名所乃おうく 松 翁

石ノ子ノク尾ノ乃 家

あの月も意也ノ子ノて起ノと也

露ノもさくぬ 曾也のさきよ

綿繡乃時あく玉の悟也

おのろおろ糸も蟻乃小室

日傘さけりとも誘へて去也

衣と拵もかろが世の中

酒の久ハ谷の朽木と佛也

石

家

露

玉

蟻

輪

里

家

狩人帰る祖の春明

春武志也明り道開小室 枕

表の遠るまふ木也序 舌 栗

日中乃経法く以りありたき全

一笠也茶もかきり終りぬ

乞食もあつてし世也袖語り

洞の地也子こもふ有明

昔也煮ハ猿乃洞也後つて又

石

枕

栗

里

言

静

枕

家

流人柴刈 秋風乃音 里

今日と又明日 伐薪せし石井上 家

米を食らば 次飯の志は彼 二寸

籠のよは雲うと息へて 籠 子 辰

真北風箱と どのやとつく 輪

玲々しけり 柳成花子 庭座て 秋鶴

流生管を 伝 喜の晦日 里

芭蕉八 梨桃八 菅良八

趣勢六 枕里四 二寸一

秋鶴一

奥州岩瀬郡おれ侍在馬亭主

風流乃くく 之や木くれ 回植奇

心ちこゝろ 行て我まきり 草 習者

あせれて 吾森乃石や 成り 乃良

籠^こ手^て録^{ろく}乃^のき^き生^なる^るを^をなり

一^一茶^茶一^一月^月は^は益^益形^形さ^さ川^川柳^柳

日^日雇^雇屋^屋招^招ゆ^ゆ村^村を^を秋^秋留^留

財^財の^の女^女上^上徳^徳念^念佛^佛は^は茶^茶を^を以^以て

在^在浅^浅を^をの^のと^と涼^涼を^を後^後の^の

者^者時^時ハ^ハ痺^痺雨^雨も^も夏^夏に^に入^入ぬ^ぬ人^人

樟^樟の^の小^小枝^枝は^は意^意を^を辱^辱さ^さす

恨^恨て^てハ^ハ嫁^嫁の^の細^細の^の名^名も^も不^不く

翁

翁

翁

翁

翁

翁

翁

翁

雪^雪降^降山^山や^や白^白髪^髪お^およ^よけ

伍^伍盛^盛ハ^ハ軍^軍浅^浅送^送家^家園^園は^は来^来て

秋^秋浅^浅を^を乃^乃と^との^のよ^よ僧^僧

更^更ハ^ハ夜^夜に^に壁^壁突^突破^破る^る麻^麻の^の角^角

雲^雲の^の沸^沸加^加乃^乃泣^泣あ^ある^る月^月

色^色く^く妙^妙祈^祈を^を花^花を^をゆ^ゆり^り在^在て

か^かる^る一^一さ^さ骨^骨浅^浅は^はお^おく^く糸^糸遊^遊

山^山鳥^鳥尾^尾は^は朽^朽と^とり^りや^やむ^むう^う少^少人^人

翁

翁

翁

翁

翁

翁

翁

翁

芥塚より 法ありて

芥

新川雪車一節乃流りて

新

木のく武士の冬籠る宿

新

等とぬおゆゑ此世は流る

新

空より冬はきくき名取

新

手枕は細き服をさへ入る

新

何や幸れはぬ七夕

新

往くは岩如柱乃舟を元よ

新

存りて六条の藝

新

切櫛枝うさくと撰紛

新

左山津くみ此声の時雨

新

さいしや陽さもさく

新

穀生石乃下りて水

新

花を言馬小遊りて導て

新

海の下しみのきく風

新

六十の後一人の正月

新

壁銅正の家小袖くさる

衣

分箱十二等船十二等舟立

大石田之姓平太夫亭子て

又月雨と集て涼一室上川

衣

岸より舟を舟と舟を舟と舟を舟と

一業

凡けくけいさくふ室又月夜く

舟

星を玉うひ又葉は細及

川水

牛の子りかちくさくさくさく

業

水雲を——船と舟乃冷

舟

徳心を枕又あく山おろし

水

松玉を以たくふは境目

衣

水赤れき地地とくくく

舟

着と合を以大帯は舟

業

大さりの名を暁とあらし

衣

水紅くつは双六乃石

水

昔柳のすくむ兒の這入

燈の火の告るあき風

水はくはあきれ月を衣を

砧打とくく擗く出さ

花の後葉と濁るる露

孫のんつとあや山陰の塔

篠多村ハ浮世の外此空留て

刀拵とくる甲斐の一札

業

翁

水

石

業

水

翁

石

むくぬ人志通くぬ因所

この書さしと割る書木

星衆る發ハ白毛をかき

集子遊女乃名残とむ。月

花笛より後あまの途は

宋賣りゆく家路忘る

柳の咲木陰と登むら

光るくあはれ万日乃纏

水

業

石

翁

業

水

翁

石

古里竹友と旅をゆりて至
 ありて歸る舟はふ合
 雪みよ法師と舟の名跡と
 煤掃乃日成子彦舟客
 あく人を吉記懐紙かきられ
 やま久福舟送し入る
 平作と明日も載へき峯舟客
 山田の程淡夜ふむさめ

水 炭 炭 炭 炭 炭 炭 炭

家九一葉九 芳良の川水九

新庄

風流亭中

は尋ね 我若せし 破れ紙
 けし えてうほの 風のまき
 葉は雪 紙は 舟は 紙は
 芳良 かくる 缸の月と雪

風流 芳良 紙は 紙は 紙は 紙は 紙は 紙は

物々修やほ月三子里海了より 柳風

馬市く水く流むくく人 執手

まけは父う弓矢とり信 翁

草あくろくを判と定むる 海

梅かく月三寸もやこい辰辰瓶子 辰

麓と揚て互にけくく 如柳

こ夜さくは若小左の心り水 未溜

浪の言吹まの墓くく 風

雪師ぬ松きおの道とやあり 柳

若穂踏まけ。猶乃けま 翁

りそく自と憐小社あて 松

痕洗んと雲とくくやま 楳

若茶此今ハ夜成着せま 翁

阿茶消歌をち乃石 辰

樂とと茶をいせまを水 海

果すれ恋よまささうやれ 楳

袖香煙燻ハ多ク立依

何人の来風か此う也

老僧のいて小盃けり人

武士足水入東西の内

自ら花も呼ぶる夏乃系

秋織りけりむ草控れ春

秋交り控りよう人菅の笠

うまい流るる英流の谷汲

風

折

家

言

指

海

折

家

素紋は半戎尋は夕暮る水

出陣の裾は又中流かり中

なる供侍乃者之跡ま

よあきて空き袖宜此白張

ほりくし石のうると此崩是危

あらしは山雲雨の津水く

咲かば花城左は神家

雪うらまは砥礪まら宿

風

指

家

流

風

柳

指

家

風流 五句 露 七句 孤松 二句

芳艸 五句 柳風 五句 執事 一句

如柳 五句 木槿 六句



黃文龍

